

資料3 名称、キャッチフレーズについて

熊野川懇談会
平成19年10月22日(月)
第3回 グループ(合同)会議
資料3 名称, キャッチフレーズについて

現在、熊野川懇談会におきましては、熊野川に係わる流域の課題について、専門家の立場からの意見を示すため、「熊野川河川整備計画の策定に向けて」という名称でとりまとめをおこなっております。この意見集の名称につきましては、まだ内容がまとめられる以前に決められたため、現在とりまとめ中の内容にそぐわないところがあります。また、この名称、とりまとめ内容に合わせて、キャッチフレーズについても、審議は行ったものの決定まで至っていない状況です。

これらの内容につきましては、次回検討会で審議を予定しております。

1. 名称について

以前の検討会において、以下の名称案を示して審議した結果、現在の名称である「熊野川河川整備計画の策定に向けて」が選定されました。

<名称案>

- 「熊野川河川整備計画の策定に向けて」
- 「明日の熊野川の整備のあり方」
- 「熊野川の明日を考える」
- 「未来の熊野川のために」
- 「熊野川を未来に引き継ぐために」
- 「自然と歴史に満ち溢れた熊野川を守るために」

- 「熊野川未来ビジョン」
- 「熊野川夢未来計画」
- 「熊野川マスタープラン」
- 「夢あふれる熊野川流域圏構想」
- 「熊野川流域夢未来構想」

2. キャッチフレーズについて

これまでに、以下のキャッチフレーズが提案されています。

■「満緑の三県映えて熊野川」

親しみやすく古い歴史観念にとらわれなくて広大な自然を一步前進したイメージにしました。

■「山の国 川の国 熊野」

まず紀伊半島という独立圏を『国』で表現。次に小中の地理？教科書では日本は“山国”との表現が多いが、それはそれで、その通り。ましてや紀伊半島は山岳地域。しかしモンスーン気候の“山国”日本は、また大小無数の河川が走る。とりわけ熊野川は自然豊かな河川であり(ダムがなければ)、悠久の歴史の象徴でもある(“悠久の歴史”は河川沿いの看板で見た気がする)。ところが“川の国”は当たり前すぎて、これまで誰もキャッチにしなかった。そこで上記のキャッチフレーズとしました。

■「熊野の川のせせらぎに聴く歴史・未来」

河川整備計画にあたり、自然災害の克服を単に目指すだけでなく、人と自然が共生することが重要である。そのため、「自然を良く知り自然との調和を図るため自然の声を聞く」このことを「熊野川のせせらぎに聴く」としました。なお、意識的に「聞く」のではなく、感覚的に体に入ってくる「聴く」にしました。最初「過去・未来」の反対語にしようと思いましたが、事実としての「過去」より、自然や人間の生活史を含むような「歴史」にしました。従いまして私のイメージは、「これまでの歴史とこれからの将来を考慮した自然と共生する河川計画である」というものです。

■「世界遺産の熊野川

美しい熊野川

交流と連携の熊野川」

川では世界遺産唯一・日本文化源流の意味を含めて

■「神々の交流の地

自然と文化の熊野川」

日本人は長い歴史の中で、私共を育ててきた日本の風土と民族の御先祖を尊んで来ました。その真髓が日本の神々であり、神々の故郷が熊野であります。建国の日(2月11日)といわれる神武帝が大和の橿原に都を建てる前に上陸したのが熊野であります。以来、熊野には大和民族の祖神を祀れる地として全国から人々が熊野詣として参詣に来られました。

神々を祀られる熊野三山(本宮、新宮、那智)の交流の川が熊野川であります。そして、この熊野川は美しい大自然の中に日本の長い歴史と文化が刻まれております。「神々の交流の地、そして自然と(長い歴史の)文化の熊野川」であります。

■「癒しと活力の源、聖なる熊野川」

会議で例示されたキャッチコピーがいずれも、癒し系、静的に感じられたので、熊野川が日本に貢献している重要な機能である水力発電、そして、木材産業、観光産業、等、更には、今後の地場産業発展の活力源となる期待を込めて考案した。

■「ふれあいの文化たたえる熊野川」

古くから熊野川の文化(自然や歴史、民族伝承)とふれあい親しんできた流域の人々。「文化をたたえる」は湛える(いっぱいにする)と称える(賞賛する)にかけています。